

9月10日（木）「5年6年 被爆伝承講話を聴きました」

被爆伝承者の山本さんが、広島からお越しくださり、平和学習の一環として、被爆体験伝承講話を聞きました。

講話では、まず原子爆弾がどのように開発され、なぜ広島が投下目標となったのかについて、当時の状況を交えながら説明していただきました。そして、1945年8月6日、広島に原子爆弾が投下された瞬間に起こったことについて、詳しくお話しいただきました。原爆は、強烈な熱線と爆風によって一瞬のうちに多くの建物を破壊し、人々の命を奪いました。爆心地周辺では非常に高い温度となり、爆心地から遠く離れた場所でも、熱線によって火傷を負った人がいました。さらに、原爆の大きな特徴として、目に見えない放射線による被害についても教えていただきました。放射線は身体の奥深くまで入り込み、細胞を傷つけます。そのため、原爆投下直後だけでなく、何年も経ってから病気を発症するなど、被爆者の苦しみは長く続きました。

講話の中では、爆心地から約1.5kmの場所で被爆した、当時6歳だった女性の体験もお話しされました。原爆が投下されたとき、女性は自宅で母親の近くにいました。突然、大きな衝撃を受け、家が崩れました。母親に助け出されて外へ逃げると、そこには、けがをした人、火傷を負った人、血を流している人など、これまで見たことのない光景が広がっていました。避難の途中には黒い雨が降りました。母親とともに農家の方の畑で雨を避け、しばらく休みました。その後、避難先で白いおむすびをもらいました。極限の状況の中で食べたそのおむすびは、女性にとって今でも忘れられない、人生で一番おいしかった食べ物だそうです。一方、広島に残った祖父は亡くなり、兄も全身に大きな火傷を負いました。薬も十分になく、家族は兄の火傷を治すため、きゅうりをすりおろして傷口に当てました。幼かった妹も、兄のためにきゅうりをすりおろし続けました。その後、兄は長い年月をかけて少しずつ回復しましたが、放射線の影響による病気に苦しむことになります。また、火傷の跡を見た周囲の人から心ない言葉をかけられるなど、被爆者がその後も苦しみ続けたことについてもお話しいただきました。

こうした被爆者の体験を語り継ぐ活動が続ける中で、平和について考えることの大切さを子どもたちに伝えてくださいました。「平和とは、戦争がないことだけではない。安心して生活でき、一人一人が輝いていることではないか。」そして、温かい思いやりや、譲り合う心、助け合う心が平和につながることを、戦争をするのも平和な世界をつくるのも人間であることを語られました。子どもたちは、被爆者の方の体験を直接聞くことで、原爆や戦争が、たくさんの命を奪っただけでなく、その後の人々の生活や家族、人生にまで大きな影響を与え続けていることを学びました。これから修学旅行に向けて、広島での平和学習を進めていきます。今回の講話で聞いたこと、感じたことを大切にしながら「平和とは何か」「自分たちにできることは何か」を考えていきたいと思えます。

